小林恭子の ロンドン発 グローバル随想



第45回 若い身体によみがえる戦争

イラスト・題字：長峯亜里

「サムライ精神」とは

ロンドンの中心街ベーカー・ストリート駅から数分の場所に、日英の相互理解促進を目指す大和日英基金の建物がある。９月30日、まだ夏の名残を感じる暖かな夕方、翌日から始まる現代美術展のプレビューイベントに参加するため、足を運んだ。

最初に通されたのは奥の小部屋だった。暗がりの中で、床に置かれたスクリーンに目を向けると、日の丸の鉢巻きを締め、旧日本海軍の飛行服を着た若い男性が、カメラに向かって両親への別れを語っている。一瞬、本物の記録映像なのかと思い、どぎまぎしながら画面を見つめた。

青年は、出撃を前にした特攻隊員として、両親への別れを語る。すると、画面には姿を見せない監督から注文が飛ぶ。「もっとサムライ精神を表現して」。青年は何度も同じセリフを繰り返す。そのたびに監督は、さらに「サムライ精神」を求める。しかし、そもそも「サムライ精神」とはどういうものなのか。

青年が絞り出すように発する叫び声を聞いていると、次第に直視するのがつらくなってくる。この作品は、日本の現代美術家、小泉明郎（めいろう）さん（50）の映像作品『Portrait of a Young Samurai（若き侍の肖像）』だった。2009年に制作され、現在は英テート美術館のコレクションにも収蔵されている。



『若き侍の肖像』（2009年）の映像より
写真提供：アネット・ゲリンク・ギャラリー（アムステルダム）、無人島プロダクション（東京）

自動化された人間

小泉さんは戦争やナショナリズム、集団の記憶、トラウマなどを題材に、映像を中心とした作品を発表してきた。2021年には英国の主要な現代美術賞「アルテス・ムンディ賞」を共同受賞している。今回の個展のタイトルは「Spirit of Automatism（オートマティズムの精神）」。

主催者の大和日英基金は、小泉さんが考える「自動化された人間」を、「あたかも自らの自由意思を奪われたかのように、無意識に行動する人」と説明している。「サムライ」作品は地上階に、複数の別の作品は上階に展示され、建物全体が「小泉アート」に包まれた。

上階の一室で展開されていたのが、『The Angels of Testimony（証言の天使たち）』（2019